
あなざーばす。～行き先無制限～

件

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなざーばす。ー行き先無制限ー

【Nコード】

N5897E

【作者名】

件

【あらすじ】

何気なく乗ったバスは、なんと行き先無制限の裏バス『あなざーばす』だった！？生きるのに疲れた人達の待つバス停に停まる『あなざーばす』は、その人に一番必要な場所へと向かってくれます。あ、人生まんざらでもない・・・と思える事を願って。

一人目のお客様

「あーもうサイアク・・・。」

薄暗くなりかけた通学路を、ブツブツと文句を言いながら神崎美奈は歩いていた。

この頃、何をやってもうまくいかない気がする。なにをやっても空回り。ついさっきも、半年間付き合っていた彼氏から別れを切り出されてしまった。

自分なりにいい彼女でいようと、頑張ってたのに・・・。

収まりかけていた泣きたい衝動が、またむくりと顔をもたげてくる。それを慌てて胸の奥に押し込める。

やるせない気持ちを抱えたまま、とぼとぼと歩いているうちにいつの間にかバス停に着いていた。

「ええっもうバス行っちゃってる!」

時刻表と腕時計を交互に恨みがましく睨む。しかしこうしていても仕方がないので、取り敢えずバス停の脇の古ぼけたベンチに腰を下ろし、あと10分後、とため息をつく。辺りはすっかり暗くなり、車も通らなくなってきた。痛いほどの静寂に、息が詰まる。

「ああーもう!憂鬱で潰れちゃうよ!」

こうしてじっとしていると、失敗した事ばかり頭の中に浮かんでくる。思わず頭を抱え込もうとした、その時。

「!!!?」

突然目の前が真っ白になった。眩しい、と美奈は反射的にぎゅっと目を瞑った。

一人目のお客様（後書き）

拙い文章ですみません。もっと精進します。『あなざーばす』を読んでいただき、ありがとうございます。

不可解なバス

近くで聞こえるエンジン音。ぷしゅーっと空気が漏れるような音。
「・・・バス？」

美奈が恐る恐る目を開けると、そこにはおかしな光景があった。

10分後にしか来ない筈のバスが、当たり前のように停まっているのだ。夜道に白いバス一台。

腕時計を見ても、やはりまだ5分も経ってない。

おかしい。

バスが時間を間違えた？

いや、そんな筈は。

「お客さん。乗らないんですか？」

はつと我に返った美奈は、急いでその白いバスへ乗り込む。

彼女は気付いていなかった。その白いバスの横腹には、車体に映える鮮やかな青で小さく『行き先無制限』と書いてあったことに。

慌ててバスに乗り込んだ美奈は、まずおかしいと感じた。

「あのお・・・」

恐々と運転手に声を掛けてみる。声を掛けて、運転手を見たとき、思わず驚いてしまった。

この人の髪・・・地毛かなあ？

まず目を引くのが彼の髪。永い時を経たかのように綺麗な白なのだ。帽子を目深に被っているため目元は見えないが、筋の通った鼻梁^{びりょう}。

形の良い口元。制服に包まれたバランスのとれた瘦躯。かなり若いように見えるのだが。

普通なら釣り合わないはずの若さと白髪は、彼のバス同様の不思議な雰囲気を引き立てて、彼の魅力に変えていた。

「何か？」

思わず見惚れていた彼女をちらとも見ず、運転手は抑揚の無い返事を返してくる。

「え、あ、そのっこのバスって・・・料金箱とかは・・・」

そう。このバスが一番の奇妙な点は、運転席と座席以外何も無いのだ。ついでに言うともあまり繁盛してないのか、他に客もいない。

「見て分かりませんか。ありませんよ。」

「ええっ何で!？」

「必要ないからですよ。このバスには。」

（有り得ない。そんなバスある筈ない。嘘だ、そうだ、これは夢だあっ!!）

「発車しまーす。」

彼女の心の叫びも空しく、バスは速度を上げ始めた。

不可解なバス（後書き）

進歩していませんね・・・筆力が。

もうホントにすみません。一応次の話で少しは運転手の出番を増やそっかなーなんて思ってます。

もし良ければ続きまで・・・や、止めておきます。皆様に売り込むのは。

お読みいただいて本当にありがとうございました。

虚無と平穩

「ちょっと待つてよ！このバス何処に行くの？！」

走り出した行き先不明のバスに不安を隠しきれず、美奈は裏返った声で叫ぶように運転手に聞く。

反応なし。

おーい、聞こえてる？

見ると、運転手はマイクを手をしている。

「こんばんはー今夜は行き先無制限の裏バス『あなざーばす』をご利用頂き、誠にありがとうございます。只今このバスは、お客様に今一番“必要な場所”へと向かっております。念のために言わせて頂きますが、何等かの悪質な宗教の類ではありませんのでご安心下さい。」

悪質な宗教団体より悪質だろーが。

つーかマイク使わんでも聞こえるわ。マニュアルが全てかオイ。

我ながら、腹を立てるポイントがずれているとは思っ。

苛立ちが収まってくると、自分の不甲斐なさが嫌になって気分が沈んできた。俯く。

しんとする車内。

静かになると、自分の失敗したことばかり頭に浮かぶ。

もう、別れよう。

あ、さっきの彼の声だ。

正直お前といてもつまんねーんだよ。

そーだったんだ。ごめんね。

もう嫌だ。

なんでこんな事ばかり・・・。

私、何か悪いこと、したかなあ・・・。

悲しいわけではなかった。ただひたすら、ぽっかりと暗い穴があるような、そんな虚無感だけが心を占領していた。

「・・・悩んでいますね。」

「！」

ずっと黙りこくっていた運転手がいきなり声を掛けてきた。突然のことに反応が遅れる。

「え・・・」

「話してみてくださいませんか？楽になるかもしれません。」

さつきは気付かなかった、運転手の澄んだアルトの声。

綺麗な声してる・・・

なんか、懐かしいな・・・

「・・・」

僅かに温かみを含んだ声音に、気持ちが落ち着く。

・・・話して、みょうかな。

思い切って、美奈は口を開いた。

虚無と平穩（後書き）

ここまで読んでくれてる人いるでしょうか・・・？
引っ込みつかなくなっただんでしょ？

しんどいでしょ？

じゃなきゃ読んでくれてる筈ナイヨネー！

とひねくれてみたり。

読んで頂いてありがとうございます。

思い切ったのに・・・

「私の家、お母さ・・・母がいないんですよ。」

がさがさがさがさ

「私と弟が幼かった頃に・・・病気で亡くなったんです。」

ばりばりばりばりっ

「それからは、家事は全部私がやってて・・・でも、失敗ばかり。」

からん、ころん

「やっぱり向いてないのかな・・・？」

コロッ

コロッ

「私なんて」

コロコロコロ

「・・・さつきから気になってるんだけど・・・」

ひっそりなしに何か音が・・・してたよね？

「はい、何れひょうか？」

視線を横に向けると、そこにはチュッパキャンディをほおばっている運転手。

「話、聞いてた？」

「話？してたんですか？」

「・・・・・・・・」

ぶっつん

脳内に響いた音は、俗に言う『堪忍袋の緒が切れる』音だろうか。それとも、ホントに血管が切れた音？

どっちでも、もう意味がないけど。

「てっめえ・・・ガラスハートの乙女が深刻な悩みを意を決して話してるのによおおお！！？何呑気に飴食ってたこの野郎おおお！！！！美味しいか？シリアスモードの時に舐める飴はそんなに美味しいかあああ！！？」

「ドス効かせてシャウトする人間を乙女とは言いませ・・・ぐふっ」

思わずネクタイを引っ掴んで力任せに引っ張ると、運転手は苦しげなうめき声を上げた。

失礼な突っ込みも込みで。

「いっぺん死んでこいやあああああああああ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5897e/>

あなざーばす。～行き先無制限～

2010年12月10日09時34分発行